名古屋女子大学　紀要　55（人・社）227～237　2009

『ワイルドフェル・ホールの住人』試論
――ヒロインの人物創造をめぐって――

杉村　藍

Who is Helen Huntingdon?: The Description and Presentation of the Heroine in *The Tenant of Wildfell Hall*

Ai SUGIMURA

はじめに

アン・ブロンテ（Anne Brontë , 1820-49）の第二作目の小説『ワイルドフェル・ホールの住人』（*The Tenant of Wildfell Hall*, 1848）は、放蕩の末ついに命を落とす夫と、夫を改心させることができると信じその不義や乱行に耐える妻を、当時としてはかなり赤裸々に描いていた。そのため、出版と同時に激しい非難を浴び、さまざまな批評家たちに酷評された。『スペクテイター』（*Spectator*）の匿名の批評家は、作者には「野蛮人とは言わないまでも、粗野な人間に対する病的な愛着（a morbid love for the coarse, not to say the brutal）」[1)] があるようだと批評し、『シャープス・ロンドン・マガジン』（*Sharpe's London Magazine*）は読者、特に女性読者に対してこのような本は読まないようにと警告した。[2)]

こうした書評を受け、アンは小説の第二版に序文を付して反論を試みているが、この序文は作者自身が自分の作品をどのように捉えていたのかを知る手がかりとして興味ぶかい。もっとも重要な点は、アンがこの小説を著した意図が述べられている点であろう。

> … when we have to do with vice and vicious characters, I maintain it is better to depict them as they really are than as they would wish to appear…. Is it better to reveal the snares and pitfalls of life to the young and thoughtless traveler, or to cover them with branches and flowers? O Reader! If there were less of this delicate concealment of facts —— this whispering "Peace, peace," when there is no peace, there would be less of sin and misery to the young of both sexes who are left to wring their bitter knowledge from experience.（p. 4）

若者たちが悪徳に染まぬよう、体裁よく覆い隠すのではなく現実をあるがままに描き警告としたいというのが、彼女の主張である。他の部分では主な登場人物の一人、主人公の夫アーサー・ハンティンドン（Arthur Huntingdon）を「放蕩の仲間に取り巻かれた不幸なろくでなし」（the unhappy scapegrace with his few profligate companions, p. 4）と呼んでおり、彼に関しては彼女自身、同時代の批評家たちと同様の認識を抱いていたことがわかる。たとえ不快であっても真実を語り、それによって若い読者たちが過ちに陥らないようにしてほしいという

意図をもってアーサーや彼の放蕩仲間を描いたのであり、決して読者をいたずらに驚かせるために悪漢を作り出したのではない、というのが彼女の批評家たちに対する反論である。

アーサーの乱行が作品の野蛮で粗野な雰囲気を作り出すのに大きな役割を果たしたのは間違いない。一方、彼の妻、小説の主人公であるヘレン・ハンティンドン（Helen Huntingdon）については、アンは序文のなかでは「自然な過ちを犯してしまった」([Helen] committed a natural error, p. 4）ヒロインと述べているだけで、その過ちの具体的な内容については言及していない。ふたたび当時の批評家の意見を参考にするなら、それは悲惨な結婚へと突き進んだ彼女の「片意地な無分別」(self-willed rashness）[3] だったかもしれない。放蕩に耽る夫を更生させようとさまざまな試みをするヘレンは、作中ではアーサーとは対極にある人物として描かれており、作品の不快な要素とは一見関係がないように思われる。しかしながら、彼女に関しては、アーサーのような男と無分別な結婚をしたことだけが「過ち」のすべてだったのであろうか。忘れてはならないのは、ヴィクトリア朝の読者を驚愕させたアーサーの不行跡を克明に描いているのは、ほかならぬヘレン自身であったことである。不幸に耐える善良な妻ヘレンの激しく大胆な筆致は、彼女を単純に気高いヒロインと捉えるだけでよいのかという疑問を生じさせる。小論では、ヘレンが小説のなかでどのように描かれ提示されているのかを、プロットや語りの構造なども含め検証してみたい。

ヒロインの人物創造

ヘレンの過ちとして同時代の批評家たちが挙げた、アーサーと結婚しようとする彼女の向こう見ずな決断は、作中では次のように描かれている。結婚に反対する母親代わりの伯母とのやりとりを見てみよう。

> ‘But when Mr. Huntingdon is married, he won’t have many opportunities of consorting with his bachelor friends; —— and the worse they are, the more I long to deliver him from them.’
>
> ‘To be sure, my dear; and the worse ***he*** is, I suppose, the more you long to deliver him from himself.’
>
> ‘Yes, provided he is not incorrigible —— that is, the more I long to deliver him from his faults —— to give him an opportunity of shaking off the adventitious evil got from contact with others worse than himself, and shining out in the unclouded light of his own genuine goodness.’ （p. 165）

ヘレンの意図は善良なものであるかもしれないが、彼女の言葉には自分の動機を理想化し現実もその通りに運ぶと思い込んでいる単純さが窺える。人間の性質を簡単に善良なものに変えることができると信じているのは、作者アンが「第二版への序文」でも述べていたように、ヴィクトリア朝の女子教育が人間の美徳や善良な面のみを強調し、悪徳に触れさせないことを是としてきたことも原因しているかもしれない。

しかしここで注目したいのは、ヘレンの人間理解の未熟さだけでなく、彼女の言葉には自分ならアーサーを更生させることができるという自負、自分の力に対する過信さえ感じられ

る点である。ジュリエット･マクマスター（Juliet McMaster）はこの発言に関して、「自分を二人分も善良になれると思い込み、放蕩者を改心させ罪びとの魂を救うことができるなどと考えるとは、ヘレンの傲慢、並外れた尊大さである」(It is her hubris, her special arrogance, to suppose that she can be good enough for two, reform the rake, and save the sinner's soul）[4]と述べ、ヘレンの性質に隠された傲慢さを指摘している。ヘレンがアーサーとの結婚生活で彼の更生に失敗するのは、彼女が自分の未熟さを悟るだけでなく、彼女の抱いていた自負心が打ち砕かれたことをも意味している。そしてこの「夫を立ち直らせる妻」としての彼女の傷つけられたプライド、敗北感こそが、彼女とアーサーとの関係において重要な要素となっているのではないかとわたしは考える。

彼女の試みの失敗とその敗北感が、夫への感情に変化をもたらしている様子は、次の引用からも読み取ることができる。

> How shall I get through the months or years of my future life, in company with that man —— my greatest enemy —— for none could injure me as he has done? [...] how cruelly he has trampled on my love, betrayed my trust, scorned my prayers and tears, and efforts for his preservation —— crushed my hopes, destroyed my youth's best feelings, and doomed me to a life of hopeless misery —— as far as man can do it —— it is not enough to say that I no longer love my husband —— I HATE him! The word stares me in the face like a guilty confession, but it is true: I hate him —— I hate him! (p. 297)

ここには、自分の善意を踏みにじられたヘレンの、気高く天使のような妻という理想的なイメージとは異なる一面が示されている。彼女の怒りが、愛を裏切られたことに対する絶望から生まれたもの、すなわち愛していたからこそ生じた憎しみであることは容易に推察できる。しかし、顧みられない愛が受動的な悲しみに終るのではなく、激しい怒りとなって現れている点は特徴的といえるだろう。ヘレンは盲目的に夫を信じ、許し、自らを捧げ尽くす妻ではなく、度重なる失敗から彼に対して冷たく苛酷な妻へと変貌していくのである。[5]

二人の関係が変わり始めるのは、第24章のタイトルにもなっている「初めての言い争い」（First Quarrel)からである。この最初の諍いは後の夫婦の関係を象徴しており興味ぶかい。原因はささいなことであったが、昔の恋人をかばい妻ヘレンのプライドを傷つけたアーサーを、ヘレンは容易に許そうとはしない。

> I was not really angry: I felt for him all the time, and longed to be reconciled; but I determined he should make the first advances, or at least shew some signs of an humble and contrite spirit, first; for, if I began, it would only minister to his self-conceit, increase his arrogance, and quite destroy the lesson I wanted to give him. (p. 200)

本当には怒っていないし和解したいといいながらも、彼女は決して妥協しようとはしない。夫の性格矯正のためであると説明してはいるが、彼女が求めている夫からの最初の歩み寄りは、実際には言い争いの後アーサーが彼女の部屋を自ら訪れ、中に入れてほしいと頼むという形で示されている（p. 199）。二人の和解を阻み状況を複雑にしてしまったのは、それを拒ん

だヘレンのプライドの高さである。

これ以後、二人の関係は、どちらが先に折れるのか、どちらが相手を支配するのかという、一種のパワー・ゲームの様相を呈してくる。闘争の勝者となるため、相手の感情を傷つけ支配し、同時に自分が傷ついていることを悟られぬように虚勢をはる。ヘレンの意図はしばしば、アーサーを悪徳から救いたいというよりも彼をいかに出し抜くかにあるようにさえ思われる。彼が一人ロンドンへ行くという計画を持ち出した時の二人の様子は、これをよく表わしている。

> He cast a searching glance at me, as the servant withdrew, expecting to see some token of deep astonishment and alarm; but, being previously prepared, I preserved an aspect of stoical indifference. His countenance fell as he met my steady gaze, and he turned away in very obvious disappointment, and walked up to the fire-place, where he stood in an attitude of undisguised dejection, leaning against the chimney-piece with his forehead sunk upon his arm.（p. 203）

実際には驚き戸惑っていても、彼女のプライドが感情を表に表わすことを許さず、ヘレンは夫に対して無関心なふりをする。これによって妻を動揺させようという彼の気を挫き、ヘレンは優位に立とうとするわけであるが、これは当初、夫を放蕩仲間から切り離し更生させようとしていた彼女の本来の意図とは明らかに異なるものである。夫を理解したり解決策を模索する以上に、彼女はしばしば夫と争うことに汲々としているのである。

夫を放蕩生活から立ち直らせようとするヘレンの試みが失敗に帰している原因は、彼女とアーサーとの関係の変質だけでなく、ほかならぬ彼女自身にあるのではないかと思われる部分もある。アーサーはヘレンではなく、不義の関係にあったアナベラ（Annabella）の存在によって一時節制に努めることができた。アナベラが成功する一方で、なぜヘレンの努力は報われないのか。

> ‘Well,’ resumed she [Annabella], ‘have you not observed this salutary change in Mr. Huntingdon? Don’t you see what a sober, temperate man he is become? You saw with regret the sad habits he was contracting, I know; and I know you did your utmost to deliver him from them, —— but without success, until I came to your assistance. I told him, in few words, that I could not bear to see him degrade himself so, and that I should cease to —— no matter what I told him, —— but you see the reformation I have wrought; […]
>
> But I desire no thanks,’ she continued, ‘all the return I ask is, that you will take care of him when I am gone, and not, by harshness and neglect, drive him back to his old courses.’（p. 306）

この引用で注目したいのは、アーサーを放蕩に追いやるであろう要因、すなわちヘレンの失敗の原因を、彼女が夫に対して厳しく、彼を無視する点だとアナベラが指摘していることである。アナベラはヘレンが夫の節酒のために必死の努力をしてきたことも、しかしそれにもかかわらず失敗続きであったことも知っている。そして何よりアーサーを実際に節酒させることに

成功していることからも、彼女の指摘は単なる正妻ヘレンへの当てつけを超えた真理を含んでいるように思われる。夫とのパワー・ゲームにおいて、冷たい無関心がヘレンの一つの武器であったことも、アナベラの言葉と一致する。何より、アナベラの推測の正しさは、彼女がハンティンドン家の邸宅グラスデイル・マナー（Grassdale Manor）を去った後、ヘレンの冷たさがアーサーをふたたび飲酒に駆り立てるという事実によって証明される。これは同時に、アナベラの方がヘレンよりもアーサーを理解していたことを示しており、ヘレンの夫に対する理解不足が、彼の更生計画の失敗の原因になっていることが暗示されている。

アナベラとの関係では、ヘレンの激しやすく残酷でさえある面も垣間見られる。夫やその放蕩仲間たちから「雌トラ」（'tigress' p. 199, 'she tiger' p. 246）や「手に負えない専制君主」（exorbitant tyrant p.223）と呼ばれる彼女は、夫とアナベラとの許されざる関係を知ると自分をコントロールすることができなくなり、「彼女（アナベラ）の手を取り、抑えることのできない憎悪と憤りの表情で激しくその手を振り払った」（took her hand and violently dashed it from me, with an expression of abhorrence and indignation that could not be suppressed, p. 303）と日記に書き留めている。アーサーに対しても「わたしは冷酷、無常で、残忍だ・・・彼のことをじりじりと少しずつ殺してしまうだろう」（I was cold-hearted, hard, insensate… I should kill him by inches. p. 308）と述べている。ヴィクトリア朝の典型的なヒロインであったならば、ヘレンと同様の経験をした場合、夫の不義を発見した苦しみをなめることによって謙虚になったり心を浄化されるといった展開になったであろう。しかしヘレンの場合は、この経験が「自分の性質を憎悪に満ちたものに変えていく」（I feel that they [my afflictions] are turning my nature into gall, p. 302）のを感じている。

アーサーの卑俗な放蕩を記録する過程で、ヘレンは夫だけではなく自分のなかに潜んでいる激しく残忍な部分をも明らかにしていったように思われる。作者アン・ブロンテは「第二版の序文」のなかで、先に引用したように「（悪徳や悪徳に染まった登場人物は）あるがままに描いた方がよい」（it is better to depict them [vice and vicious characters] as they really are）と述べていたが、これはヒロイン、ヘレンに関しても例外ではなかったのかもしれない。彼女は単に模範的な妻ではなく、夫やその仲間たちと同じように嫉妬や怒り、時には残忍ささえ感じる一人の女だったのである。この点では、ヘレン自身もまた、出版当時の批評家たちの「野蛮人とは言わないまでも、粗野な人間」が描かれた小説であるという非難を免れないといえるであろう。

ヒロインの提示方法

以上見てきたように、『ワイルドフェル・ホールの住人』のヒロイン、ヘレンは、単純に気高く耐え忍ぶ妻ではなく、苛酷で敵意に満ちた面ももつ人物として描かれている。しかし、ヴィクトリア朝のほとんどの批評家は彼女を「放蕩者の郷士の気高く不幸な妻」（noble and unhappy wife of a profligate squire）[6)] と捉えていた。彼女の志高い面だけが注目され、別の一面が注目されることがなかったのはなぜなのであろうか。ここからは、ヘレンが作中でどのように提示されているのかを、小説のプロットと構造も含め、考えてみたい。

（1）性格づけ

ヘレンがヴィクトリア朝の読者たちに善良な女性という印象を与えたのには、彼女が道徳的かつ宗教観念の強い人物として提示されていることが大きい。彼女の最初の結婚の動機が相手を放蕩による破滅から救うことであると述べられているのからもわかるとおり、世間知らずではあっても、道徳的・宗教的な観念は非常に強い人物として性格づけがなされている。アーサー・ハンティンドンとの苦しい生活のさなかにも、神に救いを求める言葉が多く語られている。また、夫を非難したり彼を憎むといった激しい言い方をしたその直後には、「神よわたしをお許しください、そしてわたしの罪ぶかい考えすべてをも！」（God pardon me for it ―― and all my sinful thoughts! p. 302）と神に許しを乞うたり、同様の宗教的、道徳的な言葉を付け加えることで、彼女の過酷な言動はその印象が薄れている。

（2）他の登場人物

ヘレンが気高い妻として読者に受け入れられるのには、この小説のなかに彼女と彼女の行動を支持し正当化する登場人物が多数描かれている点も挙げられる。ミリセントやエスター・ハーグレイヴ（Milicent and Ester Hargrave）のような近しい友人だけでなく、レイチェル（Rachel）やベンソン（Benson）、ジョン（John）といった使用人らまでがヘレンに同情的に描かれており、特に使用人は「使用人は全員、彼らの主人の振る舞いをいやというほどよく知っていた」(all the servants were but too well acquainted with their master's conduct, p. 371）として、ヘレンがアーサーの許を去り家を出るのを手伝ってさえいる。こうして、第三者の客観的な意見が挿入されることで、ヘレンはその行動が正当化されている。

夫アーサーの放蕩、すなわち不良仲間との度を超した飲酒や悪ふざけ、アナベラや息子の家庭教師との関係が、道徳的に見た場合、明らかにアーサーを罪ある者として位置づけたことも、彼に対峙する側にあったヘレンを自動的に善の立場に置いたといえよう。特に、非難されて当然のアーサーが死の床にある時、看病するために敢えて館に戻るヘレンの行動は、気高い自己犠牲と読者には映る。しかも、こうして戻ったヘレンに対して言うアーサーの「ああ、ヘレン、もし君の言うことを聞いていたら、こんなことにはならなかっただろうな！ずっと前に君の言うことを聞いていたら――ああ、神よ、ずいぶん違っていただろうに！」（Oh, Helen, if I had listened to you, it never would have come to this! And if I had heard you long ago ―― oh, God! How different it would have been!, p. 427）という言葉は、結婚生活でずっと競いあって来たアーサーの敗北宣言であり、ヘレンの正しさを認めるものである。こうして、彼女の「最大の敵」(greatest enemy, p. 297）であったアーサーさえもが、皮肉にもヘレンの意図と行動の正しさを証言する役割を果たしているのである。

（3）闘争の勝者

小説のなかでアーサーが亡くなり作品から姿を消す一方、ヘレンは生き残ってヒロインとしての地位を保つことも、彼女を善良な妻として提示するのに重要な要因となっている。アーサーの死により、彼女は二人の間に展開されていた、正そうとする者とそれをはねつける者という一種のパワー・ゲームの「勝者」となった。彼女は精神の面だけでなく肉体的にもアーサーに勝ることが証明され、これによって「語る」権利――すなわち、物語を支配する権利を得ることになるのである。そのため、二人の出会いからアーサーの死に至るまで、すべてはヘレンの視点から語られることになる。アーサーには自らを弁護する術がないのに対し、ヘレン

には日記の書き手として彼女の側からの見方、意見、考えを主張する力が与えられている。日記でヘレンが語る内容を修正したり否定したりすることができず、放蕩によって身を持ち崩したならず者というレッテルを覆すことなく死に至るアーサーとは対照的である。

（4）プロット

この小説のプロットもまた、重要な役割を果たしている。よく指摘されるように、『ワイルドフェル・ホールの住人』はジョン・バニヤン（John Bunyan, 1628-88）の『天路歴程』（*Pilgrim's Progress*, 1678, 84）と類似したプロットをもっている。どちらの物語でも、主人公はさまざまな苦難を克服し、最後にはそれが報われるという筋立てである。クリスティアン（Christian）が「破滅の町」から「天の町」へと長い道のりを辿って行ったように、若く経験の浅いヘレンはアーサー・ハンティンドンとの結婚生活においてさまざまな苦しみや葛藤を経験し、最後には夫の死を経てギルバート・マーカム（Gilbert Markham）と再婚、幸福な結婚生活に至る。

彼女の二度目の結婚は、最初の結婚における失敗が彼女の落ち度によるものではないということを証明するために重要である。再婚が幸せなものであることは、最初の結婚生活の悲惨さがヘレンではなくハンティンドンに由来するものであることを仄めかす効果があるからである。こうしてクリスティアンが『天路歴程』でそうであったと同じように、ヘレンも物語のなかで幸福な結末を迎えることによって、神によって正しき者と認められるのと同様の意義が生じる。ジル・メイタス（Jill Matus）は、『ワイルドフェル・ホールの住人』では聖書が頻繁に引用され、それが小説に宗教的な枠組みを施していると指摘しているが[7]、作中の聖句の引用や『天路歴程』と類似したプロットは、作品に宗教的な雰囲気を作り出すと同時に、ヘレンを成長する信心ぶかい人物として提示するのにも役立っている。

（5）構造

小説の構造もまた、ヘレンの自己犠牲を厭わぬ道徳的なヒロインというイメージを作り出す鍵となっている。『ワイルドフェル・ホールの住人』は、基本的にギルバート・マーカムによる手紙という形で語られており、物語の中核をなすヘレンの日記もまたその手紙の枠組みに取り込まれる形で提示される。こうした語りの入れ子構造には、作者アンの姉、エミリ・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-48）の『嵐が丘』（*Wuthering Heights*, 1847）の影響が指摘されるが、批評家のなかには、例えば先のメイタスのように、この小説の二重の語り構造をぎこちないとみなす者もいる。[8]

しかしながら、ヒロインを気高い精神をもった偉大な女性として提示するうえでは、この必要以上に入り組んで見える語りの構造[9]は効果的な役割を果たしている。すなわち、ギルバートの手紙の一部となることで、ヘレンの日記は彼の語りの一部となるのである。これは厳密にいうと、ヘレンの経験を物語るのが彼女自身ではなく、ギルバートによって語られるということである。これはマリア・H・フローリー（Maria H. Frawley）も示すように、読者はギルバート・マーカムの語りをとおしてヘレンを「発見する」ことを意味している。[10] すなわち、彼はこの小説において、ヘレンを提示するうえで決定的な人物であるということになる。ギルバートはこの物語を語っている現在、ヘレンの夫であり、彼女と20年ほどの年月を幸せにそして互いに愛し合って過ごしてきたと述べている。こうしてヘレンを愛するマーカムの視点をとおして語られることにより、彼女は気高いヒロインとしての地位を安全なものとして確保

することができる。それを裏づけるように、ヘレンの日記を読み終えたギルバートは、その時の印象を次のように語っている。

> I must confess, I felt a kind of selfish gratification in watching her husband's gradual decline in her good graces, and seeing how completely he extinguished all her affection at last. The effect of the whole, however, in spite of all my sympathy for her and my fury against him, was to relieve my mind of an intolerable burden and fill my heart with joy, as if some friend had roused me from a dreadful night-mare.（p. 381）

すべての事情が明らかになったことでさまざまな疑心暗鬼が晴れた安堵を述べる彼の筆致には、「彼女（ヘレン）への同情と彼（ハンティンドン）に対する激しい怒り」(my sympathy for her and my fury against him）という言葉が表わすとおり、最初の結婚生活でヘレンが夫と一種の敵対関係にあったと同じように、ギルバートもまたアーサーを自分の敵とし、ヘレンの側に立って日記を読んでいたことが窺える。フローリーも暗示しているように、ヘレンは「天使としての地位」を、ギルバート・マーカムが彼女の日記を読んだことによって取り戻したといっていいであろう。[11] 語り手である彼のこうした基本姿勢は、そのまま小説の読者をも無意識のうちに彼の立場、見方で作品を読むよう導いてしまう。ヘレンが善良な女性という地位を回復するのは、ギルバートにおいてだけでなく、読者の印象においてもそうであるといえる。なぜなら、ヘレンの物語と読者をつなぐのはほかならぬ彼だからである。また、彼の語りのなかでは、ヘレンの日記のなかで以上に、ハンティンドンには自分を主張することが許されないのも、一層人々の意識を彼ではなくヘレンに向ける仕組みを作り上げている。

提示方法における問題点

以上見てきたように、プロットや語りの構造などから、ヘレンは彼女がもつ激しさや憎悪に満ちた部分が見落とされ、結果として気高く善良なヒロインとして提示されることになっている。しかし、小説のなかで用意されているこれらの提示方法には、若干の問題点も垣間見られる。そこで次に、ヘレンを善良な女性として提示する仕組みの問題点として、彼女の道徳的・宗教的な性格づけ、小説の語り手と、彼女の日記の３点について取り上げてみたい。

（１）道徳的・宗教的なヒロイン

ヘレンが道徳的、宗教的な観念が強いヒロインとして描かれていることが、彼女がヴィクトリア朝の人々の非難を免れ、気高い妻としてのイメージを形作るうえで大きな役割を果たしたことは間違いない。しかし、彼女の道徳観・宗教観には疑問を感じさせる点がある。

それは、夫との関係が闘争へと変質していくのに伴い、ヘレンは道徳や宗教を彼女の武器、自分を正当化する道具として利用しているように思われる点である。「悪いのはわたしではない。わたしには恐れる理由など一つもない」(it is not *I* that am guilty: *I* have no cause to fear, p. 296）と強く主張するヘレンは、確かにアーサーのような罪を犯してはいないかもしれない。しかし、道徳や正義で理論武装したヘレンは時に非情であり、この彼女の冷たさこそがさらに夫を追い詰める結果となっている。死の床にある彼の「君はすばらしく優しくて親切さ！

そしてそういったもの全部で、僕を狂わせてしまったんだ！」(you're wondrous gentle and obliging! —— But you've driven me mad with it all!, p. 412）という叫びは、自分の正しさを楯にとって彼を追い詰めてしまった妻への精一杯の抗議だったのかもしれない。

夫が恐れるほどに道徳堅固な妻として描かれているヘレンは、夫の放蕩仲間の一人、ハーグレイヴ（Hargrave）に言い寄られた際にもきっぱりと拒否することでその清廉潔白さを印象づけている。だが、すでに結婚しているという立場は変わらないにもかかわらず、ギルバート・マーカムとの関係においてはなぜ彼を拒絶していないのであろうか。二人の交流を魂だけの交歓としたり、来世での純粋な愛を誓い合うことで罪を免れているように描かれているが、夫のある身で他の異性に惹かれているのは事実である。

人間の感情は複雑で、道徳観念によってすべて割り切って考えられるようなものではないことを、ヘレンはギルバートとの関係のなかで実体験したはずである。しかし彼女はこの経験から何かを学んだのであろうか。あるいは、ハーグレイヴとギルバートの件で自分が一方にのみ異なった対応を取ってしまったことに気づいてさえいたのであろうか。この後、ヘレンは看病のために瀕死のアーサー・ハンティンドンの許に戻るが、彼女は館を出奔する以前と変わらぬ、正義によって武装した妻として描かれているにすぎず、道徳的な葛藤を経験した苦悩の跡や、それによって人間理解が深まった様子は見られない。

（2）語り手の問題

先に述べたように、ヒロインの夫となるギルバート・マーカムが小説の語り手であることは、彼女を読者にどのように提示するかという点において重要である。しかしながら、マリオン・ショー（Marion Shaw）も述べているように、ギルバートが公正な語り手として機能するかには疑問が感じられる。

> Gilbert is not without fault; indulged by his doting mother, dominating his siblings, he is hot-headed and foolish and poised to make an unsatisfactory marriage with the stereotypically feminine Eliza.[12)]

若いヘレンが向こう見ずで無思慮であったのと同じように、マーカムには激しやすく利己的な側面がある。第14章でヘレンとの関係を誤解しロレンス（Lawrence）を鞭で打ち倒す暴力事件は彼の性格の一端をよく示している。結局ヘレンの日記を読むことで誤解は解けるが、この一件はマーカムが判断を過つだけでなく、その思い込みによって極端な行動にも走り得る軽率さ、思慮の浅さを露呈している。[13)]

しかしながら、マーカムの語り手としての資質に関する不安、彼の思い込みの激しさや判断力の欠如は、ヘレンにとっては好都合に働く場合がある。彼女の日記を読んだ際、アーサーへの反感とヘレンへの愛情から、彼は自然とヘレンの立場、視点で日記を読んでしまうからである。そしてその結果、彼はヘレンを不幸に耐える尊敬すべき女性として捉え、またそのように読者に提示するのである。その意味では、ギルバート・マーカムはヘレンにとって、愛する夫であるばかりでなく、理想的な——もしくは都合のよい——語り手といえるのかもしれない。

（3）ヘレンの日記

ヘレンの日記はこの小説の中心をなしており、ヒロインの内面にもっとも近づくことのでき

る部分である。ヘレンを直接的に提示する媒体として非常に重要であることはいうまでもない。

だが、この日記にも問題がないわけではない。日記は通常読者を想定せず、従って他者の目を気にすることなく自分自身の考えを率直に表現できるメディアである。しかし、日記が必ずしも書き手のすべてを語ってくれるわけではない。ミーガン・ブロック（Meghan Bullock）はヘレンの日記について次のように述べている。

> Helen…internalizes her pain and struggles even more than before, to the point of not writing it all out in her diary. There are points where she is obviously leaving out details, or perhaps entire（important）exchanges between Arthur and herself. Helen, like Anne's contemporaries, is either lying to herself, or does not want there to be any chance that her darkest secrets be discovered. [14)]

苦しみが内面化することにより、自分自身にさえ認めることのできないこと、日記にさえ記すことのできないことが出来することはあり得る。ヘレン自身、「すべてを書き留めるなど、面倒なことは止めておこう」(I shall not trouble myself to put down all, p. 134）と書いている部分があり、彼女の日記がすべてを書き残した記録でないことは明白である。ヘレンは意識的にせよ無意識にせよ、日記を記入するにあたり、何を書き、また書かないか、内容の選択を行なっているのである。

また、ヘレンがこの日記をギルバートに渡す際、彼女は「終わりの方の数ページを慌しく切り取って」(hastily tore away a few leaves from the end, p. 121）渡した、とあり、彼はこうして預けられた日記から、さらに「あちこちに書かれた、書き手に一時的に興味があったにすぎない数節」(a few passages here and there of merely temporal interest to the writer, p. 122)を除いた形で読者に示している。すなわち、日記はヘレンによって一部読ませる必要がない、もしくは読まれたくないと彼女が判断した部分を除いてギルバートの手に渡されたのであり、彼もまたそこからさらに一部を省いている。このように彼女の日記は一種の編集作業を経て読者に提示されているのである。

ヘレンは、アーサーには日記を読まれたくないと必死に取り返そうとしたのに対し、ギルバートには自分から日記を手渡していることからも、結果的にではあるが日記の読者として後者を選択している。これは、同時に彼女の物語の語り手の選択でもあったことはすでに見たとおりである。

このように、ヘレンの日記は、内容の選別や読者の選択などの過程、すなわち一連の編集作業を経て読者に届けられているのである。これは彼女の内面を率直に綴ったものではあるが、しかしそれがすべてではないこと、そこに書き手や語り手の意識・無意識の取捨選択があったことを、読者は忘れてはならないであろう。

おわりに

『ワイルドフェル・ホールの住人』は出版当初、暗黙のうちにタブーとされていた過度の飲酒や不貞といった問題を赤裸々に描いていたために多くの非難を浴びた。作品の野蛮で下劣な

雰囲気はヒロインの夫、アーサー・ハンティンドンとその仲間たちのためとみなされ、夫を改心させようと苦心するヒロイン、ヘレンに関してはその自己犠牲を讃えた。

だが、これまで見たように、ヘレンにも苛烈で残忍な面があるのは事実で、それが作品のプロットや語りの構造などにより、強調されていないのではないかと考えられる。しかし、そうした気高く忍耐強い妻としてのヘレン像を支える彼女の提示方法には、例えば彼女の道徳観念やギルバート・マーカムの語り手としての適性、彼女の日記の性質など、さまざまな問題があるのも事実である。

しかしいずれにしても、ヒロインのヘレン・ハンティンドンは出版当初の読者たちが受け止めたような善良な妻、「穢れなき天使」(immaculate angel, p. 425) といった女性ではなく、ヴィクトリア朝の人々が想定していなかった、もしくは否定しようとしていた、女性のなかに潜む激しさや憎しみを確かに備え、伝統的なヒロインにはない面をもつ多面的な人物として創造されていることは確かだといえよう。

註

Text: Brontë, Anne, *The Tenant of Wildfell Hall*, (Oxford: Oxford University Press, 1998)

1) Anon., *Spectator* (1848) in *The Brontës: The Critical Heritage*, ed. by Miriam Allott (London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1974), p. 250. アン・ブロンテはこの部分を少し変更し、「第二版への序文」のなかで用いている。

2) Anon., *Sharpe's London Magazine* (1848) in Allott, p. 263.

3) Ibid. p. 264.

4) Juliet McMaster, '"Imbecile Laughter" and "Desperate Earnest" in *The Tenant of Wildfell Hall*', *Modern Language Quarterly*, 43 (1982), p. 355.

5) こうしたヘレンの性質を、Inga-Stina Ewbank は Maria Edgeworth (1767-1849) の流行小説 *Leonora* (1806) のヒロイン、レオノーラと比較・対照することによって明確にしている。レオノーラは当時の因習的な妻の典型ともいえるヒロインで、夫を常に理解しようとし、辛抱強く許し、耐えるのみである。

6) Charles Kingsley, an unsigned review, *Fraser's Magazine* (1849) in Allott, p. 271.

7) Jill Matus, '"Strong family likeness": *Jane Eyre* and *The Tenant of Wildfell Hall*' in *The Cambridge Companion to the Brontës*, ed. by Heather Glen (Cambridge: Cambridge University Press, 2002), p. 99.

8) Ibid. p. 99.

9) 『ワイルドフェル・ホールの住人』における語りの構造は、よく比較される『嵐が丘』だけでなく、姉シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) が最初に執筆した小説『教授』(*The Professor*, 1857 死後出版) の語りにも近いように思われる。『教授』も主人公が友人に宛てた書簡という体裁を採っており、チャールズ (Charles) というその友人は作品の冒頭の手紙で触れられるだけで小説に登場することも、後にふたたび言及されることさえない。手紙の受取人で直接物語のなかに登場するわけではないという点で、『ワイルドフェル・ホールの住人』でギルバートが手紙を宛てているジャック・ハルフォード (Jack Halford) と同じである。

10) Maria H. Frawley, 'The Female Saviour in *The Tenant of Wildfell Hall*', *Brontë Society Transactions*, (1991), p. 140.

11) Ibid. p. 141.

12) Marion Shaw, 'Anne Brontë : A Quiet Feminist', *Brontë Society Transactions*, (1994), p. 130.

13) ヘレンとの関係において、彼は前夫のハンティンドンとは一見対峙する立場にあるが、社会階級こそ違え、彼は自分がハンティンドンと同じく家父長制に与する人間であることに気づいていない。家庭内では一家の長男として母親に甘やかされ、父親のいないマーカム家の実質的な家長として、家父長制の恩恵を被る立場にある。ハンティンドンが妻ヘレンを自分の所有物として扱っていたと同じように、ギルバートは長子として母や妹弟たちのうえに君臨している。

14) Meghan Bullock, 'Abuse, Silence, and Solitude in Anne Brontë 's *The Tenant of Wildfell Hall*', *Brontë Studies*, Vol. 29, July 2004, p. 138.